

## 酒に憑かれた男たち

ウガンダ・パドラにおける「問題飲酒」と妖術の民族誌

梅屋 潔\*

### Bewitched by Alcohol

Ethnography of 'Problem Drinking' and Witchcraft in Padhola, Eastern Uganda

Kiyoshi UMEYA

#### Abstract:

This ethnographic essay aims to focus on the concept of 'problem drinking' in order to depict several modern problems that are inevitably evoked in the postcolonial moment in Tropical Africa. Based on my observation and participation in the anthropological research conducted from 1997 to 2006 in Padhola, Tororo District, Eastern Uganda, I shall describe the life histories of four individuals as concrete cases who could not quit drinking alcohol and consequently had to lose the positions that they had achieved and even their lives.

In Padhola, like all other illnesses, 'problem drinking' is not only medically diagnosed by health centers or modern hospitals but also culturally interpreted and diagnosed in indigenous terms by laymen. Anthropologists are sometimes eager to identify the essence of culture in the interpretations and explanations that laymen provide in an attempt to pursue the ultimate cause of illness. In most cases, the causes of modern, newly known illnesses and diseases, for example, HIV, Ebola and 'problem drinking', tend to be connected to witchcraft, and narrated by the idiom of domain of occult in villages in Africa. An examination of their discourses and practices, as pointed out by some anthropologists, aids in verifying that witchcraft is not a tradition to be buried in oblivion but something that is vividly functions as a vital element of modernity. At the same time, in their discourses, they suspect the linkage of new diseases with another vital modern illness, HIV. Two modern illnesses, in the absence of modern medical diagnosis, connected by the bond of witchcraft, identified as being related to each other, are considered to be the same by the natives.

With regard to the description of 'problem drinking', witchcraft and HIV, modern problems considered to be related to each other, at least in Padhola, in an ethnographic way, I shall hint at another scope of analysis in a different domain of the culture, i. e. what kind of people suffer from 'problem drinking' and HIV? How do others treat the patients in everyday life? And what do people gossip about in everyday life? In addition, this article will portray the ritual performed when they bury the dead.

Keywords: Uganda, 'problem drinking', witchcraft, modernity, elite

---

\* 東北学院大学教養学部助教授 Tohoku Gakuin University



写真1 トロロの市街地。客を待つボゴボゴも見える



写真5 キオスクでは、様々なものが販売される



写真2 トロロ市街とグワラグワラを結ぶ通り



写真6 トレーディング・センターに市が立つ



写真3 グワラグワラ村のトレーディング・センター



写真7 コングの壺を囲むひとびと（グワラグワラ村）



写真4 露店を囲って平し魚を売る女たち



写真8 酔って歌い踊る（チャムクウォック村）



写真9 泥酔して歌い踊る (チャムクウォック村)



写真13 パナナの葉を身にまといアジョレを踊り歌う親族



写真10 地酒は空き瓶やペットボトルを単位に売られる



写真14 三つの楽器でアジョレを奏でる楽団



写真11 泣き悲しみながらも撮影のために道を空ける遺族



写真15 参列者はひとつかみずつ棺に土をかぶせる



写真12 「オボウォのようになるな」と演説する



写真16 ルンベ儀礼でコンゴを飲むひとびと

## 序

ひーっ、ひーっ、という数名の男女の叫び声が夜の静寂を引き裂いた。これは死などを伝える悲しみのユールレイション<sup>1</sup>である。それに続いて、とん、とん、とんと太鼓の寂しい音が響き渡る。音の調子でこの地域で一般的なロングドラム、フンボ *fumbo* ではなく、胴の短いブリ *buli* であると知れた。私は足下を照らすためにかすかに炎を燃やすように絞った、つけっぱなしの灯油ランプを頼りに、かんぬきと鍵をあけて小屋の扉を開いた。灯油の煙と蚊取り線香の煙る小屋の中とは明らかに異質の新鮮な空気が隙間から入り込んだ。音のする方向に耳を澄ます。露にぬれたアカシアの枝には蛍が薄煙のように群がっている。2001年7月24日、23時30分ごろのことである。

「また、誰かが死んだのだ」私は、小屋の戸を開けて方角を確認し、私の暮らす小屋から1キロほど離れたとある小屋からの声だと確信して、改めてシュラフにもぐりこんだ。その小屋に住んでいるのはかねてから病を得ていた人物で、2、3日まえから容体が悪化し、寝込んでいたはずだった。

朝方に、隣人のワンデラ・メルキセデクに、昨夜飲みすぎ(メド・マ・ラーチ *medho ma rach*)で死んだ人がマゴロ・ゾーンにいる、と聞かされた。「やっぱりそうか」私は得心した。ワンデラは、最寄りの診療所の医療に常時携わって

<sup>1</sup> “ululation” は、日本風に言えば「哭く」ことだが、ある特定の目的で叫び声をあげること。比較的短いものを繰り返すものが悲しみを表す。悲しみを表すンドゥリ *nduri*、イワ *iwa* のほか、アイヤイヤイヤイヤイと手振りを加えて甲高い声をあげる喜びのユールレイション *kigalagasa*、同じく甲高いが、警報や援助を求めるユールレイションが代表的である。

いるメディカル・アシスタントで、近隣では「ドクター」と呼ばれていた。そばにいた宿舎の管理人、バジル・オケチョが、「皆時計なんか持っていないから何時かなんてわからないけど、今朝は鶏が泣く前に人の泣き声をした」という。方角から、死んだのはオポウォと推測した。「病んでいたし、食わずに飲んでばかりいたから」と付け加えた。バジルによれば、他人の死を知る手続きは、およそ4つあるという。すなわち、①悲しみのユールレイション、すなわちンドゥリ *nduri*、②方角の特定、③死を知らせる太鼓ブリ、そして④死のメッセージを伝える使い、ルウォンゴソ *Iwongotho* である。よそ者の私に察しがつくくらいである。その全てが満たされるのにそう時間はかからなかった。オポウォと親戚関係にあり、看病していた隣人がメッセンジャーとなったのである。

## I. 調査地概要

ケニアとウガンダの国境マラバから8キロほど北上すると、トロロという街に出る(写真1)。かつてはモンバサからの陸運の拠点として栄えたが、今では夜8時になると通りには人っ子一人いなくなる小さな街だ。更にそこから舗装されていない道を16キロほどいくと、私の調査基地のあるグワラグワラ村に辿りつく(写真2、3)。乗り合いバスも近隣のキソコ役場前までは行くがそこから約3キロは徒歩である。一番安価で便利なのはボダボダと呼ばれる自転車タクシーである(トロロ市街から1,000~1,500シリング。2001年現在、1USD=1755.7ウガンダシリング。所用時間は約1時間)。自転車の荷台にクッションをつけ、人力で客を運ぶ。

トロロ県、西ブダマ・カウンティの人口のほとんどを占めるのはナイル系アドラ人<sup>2</sup>である。

民族と行政区名が比較的一致していた時期には、西ブダマ・カウンティもその名を冠してパドラ・カウンティと呼ばれていた。近隣をニョレ、グウェレ、サミア、ソガなどバンツー系諸族やパラ=ナイル系の南テソに囲まれている。1997年3月から2006年9月までの間、病気などの理由で途中何度か帰国したものの、私は現地名ヤコボ・オコスとして、ここ、ウガンダ東部、トロロ県、キソコ郡のグワラグワラ村のトレーニング・センター付近に住み込んで社会人類学的な現地調査を行っている(写真4、5、6)。

ヤコボは聖書に登場するヤコブのことで、もともとはクリスチアンの洗礼名である。私の名前「梅屋」の意味を問われ、苦し紛れに“Compound with Japanese apricot.”と答えたため、当地で木になる実であるヤコボ(ジャックフルーツ)が私の名となった。もうひとつムクメリ *mukumeli* という木の実の名が候補に挙がったが、それは人間の名前には使われていないという。オコスのほうはいわゆる「太陽名」である。これは通常生まれたときの天候に因んでつける

もので、のちに2002年になってアドラ・ユニオン<sup>3</sup>の長モーゼス・オウォリを訪れたのが雨季だったために授けられたものである(コス *koth* = 雨。雨の降る日、あるいは時期に生まれた子の意。)

現地風の小屋に住みたかったが、人口密度の高いこのあたりに残念なことに空きはなく、新しい小屋を建てるのはかなりの費用が見込まれるという。また、ホームステイのような滞在も考えたが、大家となったラファエル・オウォリ教授の安全面での心配から来る強硬な反対もあり(カメラやテープレコーダーなど研究機材などの盗難を想定していたようだ)、私は教授の妻マリー・オウォリ・ニヤケチョが議長をつとめるTOCIDA (Tororo Community Initiated Development Association) という現地NGOの所有する宿泊施設に住むことになった。

トロロ県の標高は1,080メートルから1,200メートル、宿舍の標高は1,187メートル、北緯00°42′36.4、東経34°05′14.0<sup>4</sup>であり、トロロ県内では標高の高い地域だが、首都カンパラ(1,189~1,402メートル)のもっとも低地の標高とほぼ同じである。年間平均気温は、28.5度と全体の平均が24度であるウガンダの中ではやや高い。年間降水量は1,016ミリから1,651ミリのうち4月から9月までの大雨季が61.6パーセント

<sup>2</sup> 接頭辞を省いて「アドラ」としたが、その言語を正確に用いるとすれば、クラッツォララ神父の表記法にならって“Jo-P’Adhola”と表記するのが適当かも知れない[Crazzolaria 1951]。jo は「人々」をあらわす接頭辞(複数。単数は *ja*)。その後の P’も「場所」をあらわす接頭辞 *par* がその後の母音と一体化して *r* が省略されたものである。Adhola は彼らの伝説的な始祖の固有名で全体としては「アドラの場所に住む人々」の意。以下、民族名をアドラ、居住地等をパドラ、言語をアドラ語と表記する。アドラ語の正字法は確立されておらず、マケレレ大学文学部言語学科のジェーン・アルオ講師を中心とするグループと、アントニー・オケッチ研究科長を中心とするマケレレ大学生涯学習研究科グループ、そしてTOCIDA(後出)が独自にそれぞれ進めており、方針にばらつきが見られる。本稿では、私自身の表記法を用いる。

<sup>3</sup> ウガンダの民族の多くは政府からの援助の対象となることもあって、積極的にその文化振興と福利厚生のためにユニオンを組織している。アドラ・ユニオン(別名ティエン・アドラ *Tieng Adhola* は、1998年9月にモーゼス・オウォリを「王」*kere*に選挙で選び、続いて10月に組閣し、事実上の活動を開始した(“Japadhola to elect King,” *The New Vision*, 1998年9月16日、“Adhola Leader Names Cabinet,” *The New Vision*, 1998年10月26日)。

<sup>4</sup> Garmin社のGeko201による測定値であり、若干の誤差が想定される。

を占める<sup>5</sup>。アドラ人の人口は23万5,200と推計されている<sup>6</sup>。主食は伝統的には、シコクビエ（カル *kal*）を湯でこねたクウォン *kwong* だが、東アフリカで一般的なトウモロコシ *duma* を粉にしたポーショ *posho*、また1900年代はじめからはガンダ風のマトケ *matoke* もよく食べられている。シコクビエから醸造されるコンゴ *kongo* は、社交だけでなく儀礼には欠かせないものとなっている。隣接する南テソと同じく半農半牧畜である。古い記録だが、グワラグワラの耕地のうち、作物の占める割合はそれぞれ綿花〔学名 *Gossypium arboretum*〕32.41パーセント、シコクビエ〔*Eleusinecoracana*〕18.41パーセント、バナナ〔*Musa.sp*〕15.21パーセント、ササゲ〔*Vigna unguilara*〕5.33パーセント、キャッサバ〔*Esculentia/ Manihot utilissimo*〕5.26パーセント、落花生〔*Arachia hypogaeae*〕3.43パーセント、サツマイモ〔*Ipomoea batatas*〕2.81パーセントである<sup>7</sup>。雨の後にはさまざまな種類のキノコ *obwoli*<sup>8</sup>が採れる。家畜は牛を主に、山羊、羊、鶏<sup>9</sup>、七面鳥、あひるなどである。

土地が比較的肥沃なことと、降水量が豊富な

ため、テソやサミアなどから植民地化以前から移住してくるグループが多く、西ブダマ・カウンティの一平方マイル当たりの人口密度は1959年で260人、1969年の時点で348人と高かったが<sup>10</sup>、その後の戦火と、近年のHIVの蔓延とで減少傾向にあることが予想される。グワラグワラを構成する5つのLC1（zoneないしvillage）<sup>11</sup>議長によると、2001年現在のグワラグワラの人口は3,468人である<sup>12</sup>。人口のほとんどは各派のキリスト教徒であるが、一夫多妻制やウエレ *were* 信仰<sup>13</sup>など、キリスト教の教義にそぐわない制

<sup>9</sup> この地域で飼われている鶏 *gweno* (*pl. gwendi*) は、胸が大きく脚の短い *Kafukafuka*、首周りに羽毛のない *Agriculture*、羽毛が多い *Kasegere* などが一般的である。

<sup>10</sup> Langlands [1971: 5]。

<sup>11</sup> ウガンダの行政組織はLCシステムにもとづいており、選挙で選ばれた議長を中心としたLC (Local Council) によって運営される。LC1 (zoneないしvillage、ガンダ語名 *mutongole*) からLC2 (parish, *muluka*)、LC3 (sub-county, *gombolola*)、LC4 (county) LC5 (district) まで数字が大きくなるほど範囲が広がる。Local Government Act No.1 of 1997, Section 48 (1997年3月24日公布) によれば、本来は副議長、書記、情報・教育・地域活性化、治安、財政、環境、女性委員会議長、青年委員会議長、障害者対策など国会や内閣を模した役職を設けることになっている。

<sup>12</sup> 内訳は、グワラグワラ・セントラル男性117人、女性121人、男子児童283、女子児童309 (納税者93) の計923人、ルテング男性102、女性120、男子児童208、女子児童280 (納税者80) 計710、チュクルックA 男性80、女性90、男子児童166、女子児童136 (納税者72)、計475、チュクルックB 男57、女111、男子児童192、女子児童219 (納税者50) 計619、マゴロ男91、女133、男子児童211、女子児童138 (納税者88)、計661である (単位はすべて人)。

<sup>13</sup> 屋敷の精霊 *were ma diodipo*、門の精霊 *were mawankatch*、ブッシュの精霊 *were othim* など、テリトリーを有する精霊を認めるパンテオンで、この地域にプロテスタントを布教した執事キッキングの徹底的な排撃の対象となった土着の信仰 [Obillo 2000]。

<sup>5</sup> Uganda Development Corporation [1966]。末継 [1976] より再引用。

<sup>6</sup> Walusimbi [1996]。 *Ethnologue* 第15版 [Gordon 2005] の推計によれば1986年現在24万7,577人である。

<sup>7</sup> Othieno [1967: 124]。また、この地域で栽培されているシコクビエには、*Acak*、*Ayro*、*Aran* の3種、バナナには *Makego*、*Bogoya*、*Kanpun*、*Wkudo*、*Bog bog*、*Amo*、*Onyeko geri*、*Nyaruwanda*、*Gonjo Kisubi* など9種類がある。キャッサバの呼び名はその状態によって変わり、普通名詞は *muwogo* だが、乾燥させると *odumbi nyamilamia* と呼ばれる。

<sup>8</sup> *Oruka*、*Akwaro*、*Limesi*、*Amoko*、*Awoyo*、*Opende* (別名 *Nyaguti*)、*Okinye*、*Nyakilera*、*Agoro*、*Nyamagala*、*Ayala*、*Obwoli kasik*、*Obuku*、*Nyatende dian* の14種類が一般的に知られている。

度や考え方も散見される。

## II. なぜ「問題飲酒」‘problem drinking’か

1970年代のアミン<sup>14</sup>政権以来治安が乱れたウガンダでは、集中的な人類学的調査はここ30年近く行われていなかった。また、同系統のナイロート研究を見ても、なぜかアドラ人を素通りする傾向があって、先行研究は乏しい。私がここに調査地を決めたのも、そういった状況に惹かれたからだった<sup>15</sup>。

当初の研究計画では、医学的に「アルコール依存症」と呼ばれる症例が文化的な規範によって相対的であるという仮定で提唱されてきた「問題飲酒」概念をこのフィールドで再検討することになっていた。その背景には、社会人類学者たちがアルコールを儀礼の装置としてのみとりあつかうことで矮小化し、調査の副産物的な報告しかしてこなかったという1970年代までの人類学に対する鋭い批判があった<sup>16</sup>。その後80年代に入って、エスニシティ、性役割を含む

社会組織、社会統合、信念と宗教、アルコールの独占や税金に関わる政治経済的な問題、コミュニケーション、性とリクリエーション、社会変化、家族の離散や不安、アノミー、シンボリズム、犯罪、流行など、およそ文化の名で呼ばれる全ての領域がアルコールを巡る問題に集約して表れていると主張するものもあらわれ<sup>17</sup>、いくつかの論集が編まれた<sup>18</sup>。ウガンダについても既に、近隣のガンダ王国を対象に、近代的蒸留酒の浸透が伝統的な社会の紐帯を破壊したとする議論が展開されており<sup>19</sup>、私はこの議論を叩き台にしてこの病の現地での受け取られ方を分析したいという研究計画を日本学術振興会に提出したのだった。そこでは、おそらくはいかにして病になったかはともかく、なぜ病になったのか、という現地での解釈には、いわゆる秩序観念の研究で大きな成果を挙げてきた「災因論」<sup>20</sup>の考え方が適用できるのではないかと、もしそうであれば、「問題飲酒」は十分社会人類

<sup>17</sup> たとえば、Heath [1987]。

<sup>14</sup> Al-Hajji Field Marshal Dr. Idi Amin Dada (c.1925-2003)。一説には300,000人も虐殺したというアフリカのヒトラーとして悪名が高い。大統領としての任期はシンガポールにおける英連邦会議出席中のオボテ大統領から政権奪取した1971年からタンザニアの協力を得た反乱軍によって敗走する1979年まで。その後サウディ・アラビアに亡命。2003年8月16日午前7時（東アフリカ標準時間）腎不全その他により病死。220キロの体重があったと言われる。

<sup>15</sup> 出版された先行研究としては、管見するにCrazzolaria [1951]、Oboto-Ofumbi [1960]、Ogot [1967a, b]、Mogensen [2002] だけである。他に未刊のDissertationとして、Sharman [1969]、Odoi-Tanga [1992]、Yokana [1993]、Obillo [2000] がある。

<sup>16</sup> *Annual Review of Anthropology* 誌上におけるRoom [1985] が、それまでの議論を総括したものとして評価される。

<sup>18</sup> Marshall [1979]、Douglas [1987]、McDonald [1994] など参照。私が調査計画を立てたこの時期には日本でも野口 [1996] など、アルコールを社会学的にとらえる研究があらわれてきている。

<sup>19</sup> Robbins [1977]。現在ではより纏まった業績としてWillis [2002] がある。東アフリカにアルコールの浸透する歴史過程をセックス、暴力、権力、植民地化などと結び付けて描いた労作である。

<sup>20</sup> 「災因論」とは、エヴァンズ=プリチャードが一連の著作 [Evans-Pritchard 1937, 1956] で打ち出した、不幸に直面した人間が、その原因をどこに求めるかという「哲学」“philosophy”を当該文化の中心をなす支配的モチーフとして分析対象とする、という立場をもとにした長島 [1982, 1983] の造語である。長島 [2004] は、その概念が浜本満と花潤馨也により批判されたと述べているが、私はそれが明示された箇所を発見することはできなかった。

学的な対象にもなりうるのではないか、という見通しを持っていたのである。

1997年3月にウガンダに入国してから調査地に赴くまでに、首都カンバラの郊外にあるマケレレ社会調査研究所で約3週間を棒に振っていた。調査許可がなかなかおりなかったからである。聞いてはいたものの、都市の生活費は高額で、漫然と待つわけにはいかなくなっていた。しかし何ができるわけでもない。その日も催促に行き、また明日来るように言われた帰り道、丘の上にある大学のふもとのワンデゲヤという町のバーにふらふら足が向いた。まだ5時というのに、店はにぎわっていた。カウダ・スーツ<sup>21</sup>を着た身なりのいい紳士が話しかけてくる。ポケットボトルのジンを飲んでいる。「中国人かね」「日本人です」「ここで何をしているのかね」私は、マケレレ社会調査研究所に所属していること、トロロ県を中心に住むアドラ人の病気観について調べたいこと、調査許可がまだ下りないのでいつトロロに行けるかは未定であること、現地で住む小屋の当てもまだないこと、などを話した。すると男はおもむろに胸ポケットからスタンプを取り出し、当時私の使っていた京大型のカードにぼんと押しつけた。“Mulago Hospital, Professor Walumbe (MBCh, MD, FRCPath)”とある。「これを持ってムラゴ病院のオウォリ教授を訪ねるといい。彼はその地域の出身だから」昼からジンを飲んでいたこの酔

漢は、東アフリカーと評判の名門ムラゴ病院の教授だったのだ<sup>22</sup>。

このように調査に入る過程でもアルコールにまつわる逸話には事欠かなかったが、現地について驚いたのは、噂以上に現地の人々が頻繁にコンゴの壺を囲み、ワラギのコップをあおることである。それでもまだグワラグワラ村はましなほうだとわかった。隣村のチャモクウォック村は、さらに重症で、「汗を代価に食べる」という勤勉を示唆する名をいただいているのにもかかわらず、朝早くから多くの飲酒者がトレーディング・センター付近でたむろしている。幻覚でも見えているのか、壁に向かってひとり怒鳴り声を上げる老人をしばしば見たことがある。

ここで飲まれるのは、コンゴ（前出）と呼ばれるシコクビエから醸造したビールと、バナナを醸造したムエンゲ *mwenge*、それらを蒸留したングリ *nguri*（ウガンダでの蒸留酒やバナナからつくられる市販品の通称はワラギ *waragi* である。以下市販の蒸留酒をワラギと呼ぶ）である。もちろん、工業的につくられ販売されるもの以外は全て密造酒だが、首都カンバラで時折思い出したように取り締まりが行われるだけで、少なくとも首都の中心部以外ではわりに自由に飲まれている（写真7、8、9、10）。調査助手のポール・オウォラ君によれば、“*Ocheri cheri ngri, A cheri cheri ngri*”（ングリを飲むことを避けなければいけないよ、絶対だよ）というアルコール度数の高い強い蒸留酒に対する警戒心を呼びかける歌もあるとのことだが、ボーン・アゲインの敬虔な信者で一切酒を口にしない彼は「その歌は、たいがिंगリを飲みながら歌われるんだけどね」とつけ加えることを忘れなかった。

<sup>21</sup> 多くは綿でできた開襟、半袖のスーツ。ザンビア元大統領カウダが愛用したところからこの名がある。

<sup>22</sup> 彼、ワルンベ教授が1999年に亡くなったときには、マケレレ大学副学長ジョン・セブウフ（当時、学長は大統領が兼任することになっていたから事実上の大学の長）が悼んでいるという記事をウガンダの各紙は報じた。

飲酒事情とともに驚かされたのは、当地ではきわめて頻繁に人が死ぬことである。把握できる範囲内でも2週間と開けずに近隣で葬式が執り行われ、地域の人々は半ば葬式疲れしていた<sup>23</sup>。結核やマラリアなど、原因はいろいろあるが、そのうちもっとも際立ったものは、エイズ—HIVの蔓延のためであることは、誰でも知っていた。もっとも、村まで医師が来るわけでもないし、病院に連れて行かれてから死ぬなどということは平均的な村人の経済や交通の感覚からするとありえないから、正式な診断が下されてのことではない。次第にやせ細る患者の体を見て「スリム」 *slimi* というHIVのあだ名を想起し、自己診断するだけのことである<sup>24</sup>。

### Ⅲ. オポウォの「埋葬儀礼」

埋葬儀礼（オイキ *oiki*）には現在まで何度立ち会ったかわからないが、そのうち印象深いも

<sup>23</sup> マゴロ・ゾーンのLC1 議長だったオペンディ・コンスタンティノ（2001年現在60歳）によれば、彼が在任していた1993年から2001年までに合計24人の死者が出ている。2001年現在のゾーンの総人口が661人であることを考えると、大変な高率であることがわかる。年ごとの内訳は、1993年1人、1994年2人、1995年0人、1996年4人、1997年3人、1998年2人、1999年7人、2000年1人、2001年3人。

<sup>24</sup> 1982年の報告で、ウガンダにおけるHIVの蔓延の現状が初めて明らかにされた。それによると妊婦の15パーセントがHIVに感染しており、それが子供に感染する確率は60パーセントであるという。AIDS Control Programme (ACP) 議長は、「国民のほとんどが死んでしまう」と嘆息したという。*Chicago Tribune* 1993年8月17日、p. 4、Tumusiime [1991]、p. 76、*Boston Globe*、1993年7月22日、p. 10、Ofcansky [1996: 83] 参照。カンバラ郊外のカモウチャで調査したウォルマンによれば、調査に協力した健康上の問題を有する726人のうち実に71.2パーセントがHIVキャリアであるという。Wallman [1996] 参照。

ののひとつに、酒の飲みすぎで死んだといわれる男の埋葬がある。冒頭に紹介したのは、その前日の模様である。これは明確に飲酒が何らかの負の帰結と結びつけて語られた私にとって初めての体験であった。それまでの私の印象では、チャモクウォック村は飛びぬけて特殊であるとはいえ、地域全体としても国全体としても飲酒に対して寛容な社会に映っていたのだ。平日でも少し日が傾くと、コンゴの壺やポリタンクを囲む姿があちこちで見られる。隣家に住む看護婦も時折昼間からングリの微醺を漂わせていることもあった。オウォリ教授の実弟でNGO施設とそれに付随するキオスクの管理者であるバジル・オケチョは、商売ものの市販のビールをちよくちよく飲んでおり、時には隣接するバーでワラギを飲んでいることもあった。週末ともなれば、あちこちでグループができ、時には酔っ払った老婆同士が半裸で掴み合いをしていることもあったのである。大家となったオウォリ教授夫妻も夕方になるとマケレレの自宅でもグワラグワラの屋敷でも決まってコンゴの壺を囲む<sup>25</sup>。夕食は11時ごろで、6時ごろからそれまでひたすら飲んでいるのである。夕方コンゴの壺を囲むことは社交の一環として奨励されこそすれ、後ろ暗いことは全くないといっている。

フィールドノートによれば、翌25日、私は解説と通訳をかねて行動を共にする約束を前日にとりつけておいたオマディアが、いつまでたっても来ないので、午前中から参列するなら常識的な午前10時を目途に、9時30分に小屋を出発した。途中トレーディング・センターを通りかかると、バジルとアディン・フランシス（教授の親戚筋にあたる1968年生まれの若者で私の最初のアドラ語の先生）が通りから見えないところで飲んでいた。メモによれば、アディンは

グリ、バジルはビールを飲んでいたので。

近くの薬局の店員マクリナにオマディアに先に行く伝えて欲しい旨、伝言を頼む。マクリナとその親戚の老女ナンタリアが口々に、「チャンピオン」という銘柄のビールが新しく売られていると教えてくれた。「口当たりは甘い、強い。チェアマンくらい強い」という。ウガンダ人はビールの銘柄にひどくこだわる。店でも必ず指定するし、店員もその前に尋ねるのが通例である。チェアマンは、7度あるウガンダでもっとも強い市販の瓶ビールである。「試してみるべきだ」とか。どこに行っても酒の話には事欠かない。

埋葬儀礼を含め、死者に関わる行事をカリエリ *kalieli* というが、カリエリがあるときは、地域の誰もが、どこでそれが行われるのか周知されているのが普通である。カリエリは、村の生活の最優先事項のひとつなのだ。出会う人出会う人から情報を得てオポウォの屋敷にたどり着いた。

<sup>25</sup> マケレレ大学から副学長公邸横の旧副学長公邸を官舎としてあてがわれていたが、2004年、退職を機にムブヤの丘に家を建て転居した。教授のような都市生活者でも村を完全に放棄することはなく、二重生活を維持して、できる限り頻繁に帰省するのが一般的である。死亡した場合にも遺体は村の屋敷の外れに埋葬されるという社会的規範がある。この規範を共有するケニア・ルオの間で起こったのが、有名な「オティエノ裁判」である。Cohen & Atieno [1992]。コンゴは、近隣のテソ人の中で飲まれているアジョン *ajong* とほぼ同じ手順でつくられる。シコクビエの粉を発芽したシコクビエの酵母と混ぜて発酵させ、炒めたうえで酵母と水を混ぜて壺に密閉してつくるもので、それに湯を注いで葦ヤビニルのチューブで飲む。アジョンについては長島 [1972] など参照。よいコンゴを作れることが伝統的には女性の魅力のひとつと考えられていたようである。

泣き声が聞こえる。屋敷に入って香典のようなもの（当時の相場は500ウガンダシリングだが、2006年9月現在1,000ウガンダシリングに高騰していた）を係りの男たちに渡し、記帳する。私がカメラを持っているのを認めると家人は小屋に招き入れた。撮れ、というのだ。ここ数年、埋葬儀礼に参列した私には遺体の写真を撮影することが求められていた<sup>26</sup>。改めて家人に乞われもして、遺体の写真を撮影した（写真11）。記帳するノートは二種類ある。ひとつはノノ *nono* つまりクラン・メンバーたちの記帳するものであり、もう一方はモニ *moni*、近隣のひとびとが記帳するものである。クラン・メンバーでない私は、モニに記帳した。香典のようなものは、LC1レベルの行政組織で管理しているようだ。ノートを見ると、「オポウォ・ジョン・マーティン2001年7月23日ここに眠る（“Opowo John Martin otho ka 23/7/2001”）、クランはモルワ・スレ、(Moriwa-Sule Clan)、妻のクランはワグウェレ・ワニャケロ *Wagwere wanyakero*』とある。妻は近隣部族、グウェレの出身である。

オマディアが現れたのは、ちょうど正午ぐらいのことだった。これもまたワンデラ<sup>27</sup>というペンテコスタのムロコレ *mulokole*<sup>28</sup>が、やおら立ち上がりて説教を始めたころだった。曰く「オポウォは、日曜日に教会に来なかった。ボーダー（グワラグワラのトレーディング・センターの通称）で飲んでばかりいた。何も食べずにだ。彼が残してくれた教訓を大切にしよう。

<sup>26</sup> このエピソードについては、梅屋 [2005] に詳しい。

<sup>27</sup> 生まれてきたときに臍の緒が二本あると、自動的にこの名がつけられる。

<sup>28</sup> ガンダ語で *Born Again* 派のキリスト教徒のこと。

飲んだら、食べるのだ。飲むのなら、きちんと食べなさい。」(写真12)

「彼は、クリスチャンなんだ」穴は開いていてぼろぼろだが、木炭を入れて用いるアイロンをかけて折り目の入ったスーツを着た、クリストファーというれっきとしたクリスチャン・ネームを持つアスカリ<sup>29</sup>のオピオがそう解説してくれた。

続いてその妻が立ち上がり、同様に説教を始める。訃報を遠方で聞いたのか、たった今到着したばかりの女性が、屋敷の真ん中で泣き崩れた。

こうした中でも、オポウォを埋葬する墓穴は着々と掘られ、小屋の入り口の前には自転車で町から運び込まれた棺が置かれ、参列しているおもに親族たちに配られる食事の準備が進んでいる。先ほど賭殺された山羊は、吊るし上げられて内臓を抜かれ、バナナの葉の上でその肉を分配されている。内臓はきれいに内容物を抜いて、その他の部分と均等にいくつかのバナナの葉の包みをつくった。ある包みは子供を使いに行き近所に配布され、残りは大きな鍋に入れられ煮る準備が整った。脇では、べつの鍋でポーショがこねられている。

かん、かん、かん、かん・・・と打楽器の甲高い音がして、楽団が演奏を始めた。女たちがそれに併せて身をゆらしはじめる(写真13)。アジョレ *Ajore* である。「アジョレ」は、「悲しみと苦痛に満ちた心」というような意味で、女たちの踊りもそう呼ばれることがある。死んだ者の靈魂(ジュオギ *juogi*)を、新しい世界で平

穏な状態にする方法であると説明されることもある。昔は近隣部族との紛争から帰った男たちがこれを演奏することになっていたという。戦いで仲間を失うことも多かったからである。また、新たに戦いを始めるときにもこれが演奏された。「ダウィ・オニンド」*dhawi onindo*、つまり、死に至る戦いを過去に経験していることを確認し、それがまだ終わっていないことを表明するためである。

楽団は、堅い板に木製のばちを打ち付ける打楽器 *teke*、ロングドラム、フンボ、弦楽器トンゴリ *tongoli* からなっている(写真14)。楽団の歌に合わせ踊る女たちも歌詞を口ずさむ。

...wotomeran! / thwodhe oromo gi wadi yokoro /  
aa, aa, mama dhawi onindo kaa! / woto meran! /  
thwodhe oromo gi wadi yokoro / achulo banja  
machago akitimo! / wano kwongere gi yamo / kere  
dhawi onindo! olelo! olelo! / wodi mama kodhwoko,  
kere otho! / dhawi onindo kaa! olelo! olelo! / kere  
banja! kere banja! / dhawi onindo kaa! olelo! olelo! /  
wano kwongere giyamo / dhawi onindo ochulere  
banja / nyath pa mama igalo kune mogwangi kayan  
ayino? / Opowo (この部分は死者の名に置き換えられるのが通例である) kodwoko kere banja! /  
aa, aa, mama kere banja, dhawi onindo! ...

[邦訳] …きょうだいよ！／その戦いは、雄牛たちとそこで／ああ、ああ、母よ、また戦いがここに！／きょうだいよ！／その戦いは、雄牛たちとそこで／経験したことの無いような痛みを受けた／我々は死を呪う／その戦いがまた！オレロ！オレロ！（すすり泣く擬態

<sup>29</sup> スワヒリ語で警備員のこと。当時オピオは、留守中教授の住居や前述NGOの建物その他を警備するために雇用されていた。

語) / 私の母の息子は戻ってこなかった、死んだのだ! / その戦いがまたここに! オレロ! オレロ! / 痛み、そう痛みのため! / その戦いがまたここに! オレロ! オレロ! / 我々は死を呪う / 戦いはひとびとに経験したことの無い痛みをもたらす / そこから帰りの遅れた母の子は、野獣にでもやられたか? / オボウォは (戦いから) 戻ってこなかった、痛みのため! / ああ、ああ、母よ、かつてない痛みがここに、戦いはすでにここまで来た! …

アジョレが終わり、ひとしきりする。あちこちで女性たちがすすり泣いている声が聞こえる。困ったとき、悲しいときに女性がとる、頭の後ろに手をやるしぐさや、後ろ手をくむ姿勢で悲しみのため体をねじっている女性たちがいる。

小屋の中から聞こえる泣き声がさらに大きくなる。最後の別れをしているようであった。しばらくすると順に小屋から泣きながら出てくる。

男たちが「右が下だぞ」と言い合いながら遺体を棺に移し始めた。近隣のバンツァ諸族と同じく、パドラでも、男の埋葬のときは右肩が下で、女性の埋葬のときは左肩が下になるように埋葬する。これは、生きていたときの格好だ、というのだが、性交のときの正常位なのだそうである。死者に近い女たちはそれを泣きながら見守っていた。子供も二人いたが、まだ事情が飲み込めていないようできょんとしている。

棺に遺体を納め終わった直後に、それに間に合わなかった若い女性が小屋に飛び込んできて

最後の対面を求めた。彼女の哀願は厳かに退けられ、彼女は小屋の外で背を向けて泣いていた。

ワンデラ氏が太鼓を叩き、讚美歌とともに棺は屋敷の中央に設けられたシェードに運び出された。男性の信者によって讚美歌と祈願が捧げられる。

司会進行役が父親にスピーチするように促しながら遺族を紹介し、故人の業績を読み上げる。父親、続いてクラン・リーダーがスピーチする間、子供も含めて声や物音をたてるものは誰一人いなかった。クラン・リーダーは、18日に容体が悪化したこと、トロロ病院に連れて行ったが改善せず、今日に至ったことなどを説明している。オジのチャールズ・オドイにもスピーチが求められたが、兼ねてから話好きの彼は、20分経っても話すのをやめない。父親やクラン・リーダーよりも長くオジがスピーチするのは一般的ではないので、しばらくすると進行役はオドイを遮って進行した。

死者のバイオグラフィが進行役によって紹介される。ウガンダ教会で洗礼を受けたこと、子供を5人もうけたこと、また、晩年はトレーディング・センターで飲みつぶれてばかりだったことなどが言及された。遺族として紹介された妻と子供たちは、恒例に従ってさっと参列者のほうを向いて立ち上がった。

続いて棺はクランから寄進されたこと、15の白いシートと一頭の山羊が参列者(特に近親者)から贈られたこと、そしてリエド *liedo* 儀礼は明日行うことが発表された。

クリスチャンの服装をした5人の男たちが、かわるがわるスピーチをし、続けてワンデラ氏が聖書を朗読した。その焦点の多くは、故人の飲酒癖と、更にその際に食事をしない、という点に向けられていた。これは、のちに聞いたと

ころでは、かなり異例だそうである。司祭とワンデラ、そして数人の熱心な信者主導で、讚美歌が歌われた。今回の場合、プロテスタントのため、全て使用言語は、ガンダ語である<sup>30</sup>。

雲行きが怪しくなってきたが、それにかまわずワンデラ氏は再び演説を始めた。曰く、日曜日には教会に行きなさい、酒を飲むならば食事をとりなさい…。

雨雲が近づき、あわてて棺が埋葬される。参列者の持参した白いシートを裂いてつくった紐で墓穴に釣り下ろされる。墓穴の頭側は東を向いていた。本来モルワ・スレのクラン・メンバーは、西に向けて埋められるはずである。オマディアも、「ルールが変わったのかな」といぶかしんでいた。

讚美歌の歌声が響く中、参列者皆がひとつかみずつ、土くれを棺の上に投げかけていく(写真15)。一段落すると、スコップを持った男たちが、一気に棺を埋めはじめ、ちょうど多いかぶせた土かさが地面と同じになったところで讚美歌はひとたび途絶えた。しかしそれで終わったのではなかった。一段落したのを見届けてワンデラ氏が去ってもなお、讚美歌は歌い継がれたのだ。やがてそれも聞こえなくなり、オポウォの埋葬儀礼は終了した。墓はセメントを塗る部分だけを残してかたちを整えられていた。小屋の中からベッドが運び出され、墓穴の近くに置かれた。悪霊や妖術師などに遺体に乗っ取ら

れないように守るのだという。帰り道、私を含め連れ立った人々はしきりに噂しあった。「オポウォは死んだ。ングリが殺した」“*Opowo otho. Ngri neko.*”そして私に向かって、「ヤコボ、お前の友人が死んだのはどんな気持ちだい？お前も何年か前は、彼と一緒によく飲んでいたのでよ。彼も昔は村きっての優等生だったんだけどね」と人びとは口々に囁いた。私には、オポウォとともに酒を飲んだ記憶はなかった。

おそらく明日には、近親者の髪がそられるリエド儀礼が執り行われることだろう。そして、しばらくして経済的な条件が整えば、近隣の人々を招いて宴席、ムウェンゲ・マ・ピ・ワングジョ *mwenge ma pi wangujo* が開かれるはずである。さらには甥たちの手で「灰を集める」儀礼、ジョ・ブル・カシック *jo buru kasik* が行われる。埋葬儀礼の間中絶やさず燃やされていた焚き火の灰を集めるのである。このときまで雨に濡れないように灰にはビニルなどの覆いがかけられる場合もある。これら一連の儀礼は遺体を守る意味合いを持つという。遺体が土に帰り、もはや守る必要がなくなったころ、近隣全ての人を招いて行われる盛大な宴会、「忘れる」「全てのことに感謝する」儀礼、ルンベ *lumbe* 儀礼が行われて初めて、亡きオポウォについて親族が果たすべき義務はすべて終わることになる<sup>31</sup>(写真16)。ルンベ儀礼以降、災因としてその人の霊ジュオギ *juogi* が名指して問題にされることは一般的にはない。あり得るとすれば集合的な霊ジュオク *juok* の一部分として匿名的に包含されるだけである。

<sup>30</sup> カソリックは儀礼を現地語で行い、聖書も部分的に現地語に翻訳したものをを用いる。プロテスタントは、ウガンダ教会の方針でガンダ語の聖書を用い、儀礼をガンダ語で行う。また、教育方法にも方針の違いがあり、カソリック系は初等教育は現地語で、中等教育で英語を使用する。プロテスタント系は初等教育でガンダ語を用い、中等教育で英語を用いる。

<sup>31</sup> ルンベ儀礼には莫大な費用がかかるため、これをこの地域の貧困の遠因と考えるものもある。しかしながら、死者の霊魂の祟りをおそれるアドラ人が、この儀礼を省略することは今のところ考えられないという。

夕方になって、私はオボウォの死因についてより詳しく知ることになった。「酒の飲み方が悪い」「*medho ma rach.*」のは、誰かのラム *lam* (呪詛)の結果か、ジャジュオキ *jajuoki* (妖術師)の仕業だというのだ。一般に彼らは『『自然死』を信じていない』<sup>32</sup>ので、誰の死に対してもオカルト<sup>33</sup>が持ち出されるが、生前の行状によって持ち出されるオカルト的エージェントにはバリエーションがある。この地域で言う「呪詛」は、目上の者に無礼なことをした、などの理由で怒った年長者などが懲らしめのため行う公共的に承認された正当な呪術である<sup>34</sup>。それに対し妖術師の行いは反社会的なものとされ、処罰の対象となる<sup>35</sup>。また、パドラの場合、「妖術師」は、いわゆるナイトダンサー（東アフリカでは一般的にナイトランナーとして知られるが、ウガンダでは英語でこう呼ばれる）のもつ反社会的イメージとかなり重複している部分がある。ある人によると、ナイトダンサーは、日中はふつうの人間のように振る舞っているが、夜密かに出歩き、裸で、灰を体に塗りたくったり、しゃれこうべを腰から下げてカトゥール、カトゥール、カトゥール、カトゥールと音を鳴らしながら背中で他人の小屋の扉をノック

するものだ、という。あるいは、裸で片足の踵を後頭部に引っかけてとんとんと歩く、などともいう。彼らは毒を持っており、気に入らない人々、自身がナイトダンサーであるという秘密を知り告発した人々に危害を加え殺害（毒殺）することすらある、ともいう。

一方で妖術師は、意識的であれ無意識的であれ、「超人間的な力」<sup>36</sup>に訴えて他者に危害を加える者である、といっても、そのイメージは漠然としている。端的に言うと、両者をあらかず語彙としてジャジュオキしか聞いたことがない。エヴァンズ＝プリチャード<sup>37</sup>のいう意識的な邪術と無意識的な妖術という区別もなく、強いて言えばわざわざ薬草 (*harb*) をもちいたかどうか、という規準があるぐらいである。同様に異能を持つ者を指す語彙として雨や雹を降らせることができるというジャミギンバ *jamigimba* (レインメーカー)<sup>38</sup>、シココ *sikoko* (邪視もち) などが話題にのぼるが、それらも反社会的な側面と結びつくとジャジュオキとほとんど同じと認識される。

彼らは言う。「だって、普通の人間は、どんなに酒好きでもあんなに飲んだりしない。食事も摂らずにほとんどレーディング・センターでつぶれて寝ていたんだよ。病院にも連れて行

<sup>32</sup> 長島 [1972: 64]。

<sup>33</sup> 「オカルト」という用語は *Geschiere* [1997] その他によって従来の「妖術・邪術」に代わって頻繁に用いられるようになってきている。現地の解釈の曖昧さを反映しているこの用語を「妖術」とほぼ同義語としてここでも採用したい。

<sup>34</sup> 同じ動詞「ラム」には、祈願する、崇拜する、言葉に出して何事かを実現する、など善悪に関係ない中立的な意味もある。

<sup>35</sup> LC1レベルの裁判の多くは、妖術告発とその判定のために開かれる。

<sup>36</sup> *Lienhardt* [1961]、栗本 [1988]。

<sup>37</sup> *Evans-Pritchard* [1937]。後にこの区別は *Middleton & Winter* [1963] により強調されたが、アドラのように両者を区別していない社会も多くこの区別の汎用性は疑問視されうる。

<sup>38</sup> ジャミギンバは、小さな壺に人間の目のようなものを入れて持っている。その「もの」には水を時々たらし、乾燥しないように保たなければならない。雨が降ると、その泡を壺に入れる。晴れているときは、壺のかけらで壺の口を塞いで森の木の下に安置する。彼、彼女を怒らせるとその蓋を開き、雨が降らないようにするのである。

かれ、帰ってきたと思ったら、またトレーディング・センターだ。あの日だって・・・」

その夜、オポウォは、ひどく酔ってつぶれてしまったという。旧知の友人でもあるバーの主は、客も途絶えたところで、このまま朝まで放っておこうとバーを閉めて施錠し、帰宅した。ところが、これはオポウォの巧妙な作戦であった。主が帰ったあとのバーで、オポウォはほしほしにングリを飲んだというのだ。しかし、その作戦には計算違いがあった。翌朝バーの主が発見したのは、ングリでご機嫌のオポウォではなく、空になったングリの壺とその傍らで死にかけて冷たくなったオポウォだったのである。

#### Ⅳ. 呪詛で酒が手放せなくなった男

オポウォの埋葬儀礼から二日後の2001年7月27日、外から激しい叱責の声が聞こえた。隣人のエマの声である。耳を澄ますと、「ングリは良くない！量を減らせ！あの男を知っているだろう。ングリのために死んだ。あのようになりたいのか？5リットルも飲めば、たちまちショック死してしまう恐ろしい飲み物なんだよ・・・」

あの男、というのは、言うまでもなく、オポウォのことである。当時TOCIDAの一角に事務所を間借りしていた有機農法を普及するNGOのチューター、エマに怒鳴られ立ちすくんでいるのは、グワラグワラではオポウォと並んで有名な酒豪、「ワラギマン」と異名をとるオドウェであった。彼は掃除や草刈り、水くみ、運搬など単純労働で小銭を稼いで、いつでも朝からングリを買って飲んでいて、着替えも一着しか持っていないようで、いつも見慣れた黄色と黒のぼろぼろの服を着ている。その日も4年前に初めて見たときとまったく同じ服を着ている

のには驚かされた。エマは私を認めると、「私はこの男を刑務所に連れて行かなければならない、彼は私のお金をだまし取ったんだよ」

「そのお金で飲んでいたんですね」エマは私の言葉に深くうなずいて、「代わりに働くなんて言っているけど、信用できるもんか」オドウェは煙草を燻らせ、曖昧な笑みを浮かべながら、「仕事はしようとしてますよ、あなたのバナナは・・・」言いかけてエマに遮られた。「バナナをむいて蒸す仕事は生徒がやったんだよ、おまえじゃない。近寄らないで。水浴びぐらいしなさいよ、ふんぷん臭うわ。それから・・・」きっと睨みつけて、「二度とここに煙草を吸いながら来ないで。いまにあなたはそれで胸もやられて、おしまいよ」

1997年当初、私は積極的に飲む側にいたので飲酒に関する否定的な態度を続けて目のあたりにして改めて驚いた。当初は、周囲が遠慮して口にしなかった可能性もある。オポウォの埋葬儀礼の際のムロコレの説教といい、このエマの説教といい、初めてここに住み着いた1997年には見られなかった現象である。思い返してみると、2001年に再訪して気になっていたいくつかのエピソードが想起された。昨年ここに遊びに来たカンパラ在住の日本人男性が飲み過ぎて宿酔いになり、翌朝チャイ（紅茶）を飲めなかったことがあった。そのとき居合わせた二人の老女ナンタリアとドロシーは、今年になって、結局連れの女性が運転してカンパラに帰った事実など、いかに彼がたくさん飲んだかを口々に言いあいながら、「ア！ア！（強い否定または批判の感嘆詞）、カンパラまで女の子の運転で！」などと強く批判していた。私は語調のあまりの強さに違和感を覚えていた。また、数日前も若い男性が次のように嘆息していた。「白人は賢

い。一生懸命仕事をして少しだけ飲む。アフリカ人は飲んで、飲んで、飲んで…ばかり。だからいつまでも貧困に苦しまなければならないのだ」*Monitor* や *The New Vision* など英字新聞には毎週のようにアルコール濫用への忠告記事が載っていた。まだ多くは、「ビール二本（一本500ミリリットル）以上飲んだら自動車の運転はやめるべきです」というような楽観的なものではあったが<sup>39</sup>。

ある夜、夕刻を待って、私は隣人を質問攻めにした。オドウェはいかにしてあのような飲み方をするようになったのか。隣人の口は重かったが、やがて期待通り一つの言葉を口にした。「ラムなんだよ」やはり、呪詛だったというのである。オボウォについては、隣人は知らないようだったが、オドウェについては詳しかった。当時TOCIDAで働いていたアレックス・オコンゴの話。「…オドウェは、ここTOCIDAでも鍋など食器を洗う仕事を頼んでいたこともある。しかし、つまみ食いが見つかって以来、彼に仕事を頼むのはやめたんだ。誰かが彼を呼んだんだが、返事がない。手にも何も持っておらず、ポケットに何かはいつているわけでもないがオドウェはしゃべることができない。それもそのはず、マトケを6つも、口いっぱいにはおぼっていたんだ。…オドウェは結婚していたこともある。結婚した当初は家だってきれいだった。

<sup>39</sup> もっとも2006年の観察では、少なくとも首都近郊での酒気帯び、酒酔い（こういう区分はないが）についての取り締まりは厳しくなっており、警察は指示する血中アルコール濃度検査を拒否した者を逮捕する方針を打ち出した。

<sup>40</sup> ガンダ語ではゴメスという、腹に帯を巻き、肩の部分が三角形にとがった共布であつた女性向きの正装。

奥さんもきれいなゴマス<sup>40</sup>を着ていたものだ。子供もいるんだよ。女の子が一人。彼は、健康で働くんだけど、稼いだものは全部飲んじゃう。子供にノートが要るとか、ユニフォームが要るとか、奥さんだって新しい着物が要るとか、そういうことを考えないで稼いだものはみんな飲んじゃう。だからついに、本来、我々の文化ではありえないことなんだけど、実の父母のもとに帰って行っちゃったんだ<sup>41</sup>。だから彼の実の両親も怒って、帰ってきたら死ぬまでなぐるぞ、と言っているから、彼は、トレーディング・センターの鍵のかからないつくりかけの小屋の中で寝ることにしたんだよ。セキュリティなしの世界でね。奥さん？実の父母の家のキッチンで寝ているよ、子供と一緒に…それというもの、あるときオドウェは母親にお使いを頼まれてね。父の母に牛肉を持って行くように言われたんだけど、全部自分で食べちゃって。代わりに牛の糞をバナナの葉っぱに包んで持って行ったんだ。お婆さんは目が悪かったけど、すぐに気づいて怒ってね。お前なんて、駄目になってしまえ！とその場で呪詛をかけたんだ…」

いっそもも持って行かなかった方がいいと思うし、なぜ牛糞なのかも釈然としない。しかし、このエピソードは呪詛の効力と恐ろしさとともに、目上の人を敬うべきだという教訓を含んだ話としてしばしば語られている。そこには私が現在理解し得ない何らかの文化的な背景があると考えておくべきであろう。いずれにせよ、祖母に呪詛をかけられたオドウェは、それから片時も酒が放せなくなったのである。一説によると、呪詛の効果がいつあらわれるのかおそれ、

<sup>41</sup> アドラ人の慣習法には、正式な離婚手続きはないという。

そのことを考えないようにするために酩酊しているとも言い、パドラでは一般に霊の世界であるとも考えられる夢を見ないように毎夜酔いつぶれようとしているとも言われていた。

## V. バジルの死とアディンの病

ところで、先に言及したエマのオドウェへの説教は、私にふたりの人物の顔を思い浮かべさせた。アディン・フランシスとバジル・オケチヨである。既出の私と同級にあたるアディンは、任期つきのソーシャルワーカーの仕事をしてきた。小金を持っているので、煙草と酒は欠かさない。2001年8月9日のフィールドノートには、以下のような記述がある。

「…夕刻、アディンが訪ねてくる。彼は病気だ。ずっと病気だが、最近特にひどい。昼間咯血したという噂だ。隣に住む看護師のドロシー（前出のドロシーとは別人）は、『飲み過ぎよ、酒も煙草も』と冷たい。私が、インフォーマントを捜していることを聞きつけて訪れたらしい。絶え絶えの苦しそうな声で『…キソコに1930年代から住んでいるいいインフォーマントを見つけた…』という…」

私はその夜、ドロシーと月を見ながらアディンの病状について雑談したのを記憶している。記録は見あたらないが、「まだ若いのに酒も煙草もあんなに飲んで。まだまだこのコミュニティのために働いてもらわないといけないのに」という一言が印象に残っている。

その後、アディンの推薦するキソコのインフォーマントに会いに行ったのかは、フィールドノートにも記録されていないし、記憶にもない。ただ、ちょうどその下には、バジルについての次のような記述がある。

「…NGOのホールの電気（弱いものだが、

ソーラー・バッテリーが設置されている）は現在使えるのかどうかバジルに訊くと、『主電源を切っている。なぜなら、おまえには電気をやりたくないからだ』と言われた。結局は繋いでくれたが。彼も最近精神的にやや不安定なのではないか…」

当時バジルの酒量も、ずいぶん上がり、「校長だった頃（彼はポメデ小学校というカソリックとプロテスタント双方の小学校の校長をしていた。もともと対立していた両校を調停し統合したのも彼だという）はよかったが、兄の命令でこんな店を任されてから退屈で死にそうだな」など、実の兄である教授の批判を延々と述べたり（兄の批判を公言することはパドラでは一般的ではない）、非常識な行動が目についていたのである。私の自転車を執拗に欲しがり、ホールの机や椅子、ベッド、タイプライター（もちろんリボンや紙などの消耗品は私自身のものを使っているのだが）など、従来は自由に使えていたものについても賃貸料を請求しようとするなど、異様なまでの金銭への執着が見受けられた。あげくの果てには、近隣住民の要望でようやくTOCIDA入り口付近に設置されたMTN社の公衆電話のソーラー・バッテリーからの電気代を、公衆電話を使用する人々から徴収しようとしたほどである。また、オウォリ教授の家に遊びに来たカナダ人のニューフィールド博士の息子がアスカリのオウォリ＝オダカにプレゼントしたマウンテンバイクを、実兄である教授とその妻の権威を笠に、これはTOCIDAへのプレゼントなのだ、と接收し、事実上彼のものとした。教授やその妻マリーがその事実を把握していないのは明白だった。後で人々に聞いたところでは、彼が金銭に執着するのは、自らが飲んでしまった商売ものの酒代の補填で必死だったため

だ、という。

2004年6月に、私は大阪でバジルの死を知らせる電子メールをオウォリ教授から受け取った。同じ年の8月20日、ウガンダに着いた私は、意図したわけではないが、結果的にその間の事情を尋ねて回ったことになる。8月24日、私の再訪を聞きつけたアディンが一番に訪ねてきた。2年間職がないので何とかしてほしい、という。彼は我が強く、ひとところにいたり私に付き添ったりする通常の助手や通訳の勤務形態を遵守できないことはすでに経験済みなので、ノートとボールペンを渡し、呪詛についての独自の聞き書きを依頼する。聞き書きにもとづいたレポートを書いてもらおうというのである。

入ってきた噂を総合すると、晩年のバジルは、朝店を開けてからから夕方店を閉めるまでの間に約1クレート（20本）ものビールを飲み干し、夜は飽くことなくグリを飲んでいて、精神的に尋常ではないことも誰の目にも明らかだったという。例えばアスカリのオウォリ＝オダカは、バジルとの理不尽な諍いが原因で解雇されていた。ある晩、オウォリ＝オダカは夕刻になったのでTOCIDAの入り口の鍵を閉めたのだが、そのことで出入りができなくなったことを怒ったバジルは梯子をかけて入ろうとした。警備の職務上オウォリ＝オダカは咎めざるを得ない。両者は対立し、ついにはバジルが、「自分がやめるか、オウォリ＝オダカをクビにするか、二つに一つだ」と実兄であるオウォリ教授に詰め寄ったのだという。教授も含めて周囲の人間も、そのころのバジルにはほとんど何の論理も通用しないので、ただ遠巻きにするだけだった。

ある日、バジルは盥に一杯ほどの大量の血を吐いて意識を失った。ちょうど一週間人事不省だったが、意識を取り戻し、まるで子供のよう

に手を叩き、子供の歌を歌ったりしていた。しばらくしてこと切れたという。

「HIVだったんだよ」そんな噂も、耳に入ってきた。ずっと前に調べて、自分の病のことも知っていたらしい、ともいう。これも周囲に尋ねるわけにもいかず、真偽のほどは定かではない。しかし、仮にそうだとすると、オドウェについて噂されている説を敷衍すれば、バジルもいつ発病するかわからない病に怯えて飲んでいったという憶測も成り立つ。

アディンは、私がこの間の約1ヶ月の滞在中、見かけたときには必ず酒を飲み、煙草を吸っていた。たとえば、「そんなことでレポートが書けるのだろうか」と8月31日のフィールドノートには書かれている。しかし、さすがこの辺り一帯で一番のエリートだけあって（Oレベル<sup>42</sup>の試験を通過しているのは、30代ではアディンだけである）素晴らしいレポートを書き上げて、帰国前の私を大いに喜ばせた。もっとも謝金以外にかなり不当な要求をしてきたことは事実だが、1997年からの我々の友情を破壊するほどではなかった。

2006年8月15日、グワラグワラを訪れた私は予想していたことではあるがオドウェが死んだことを知った。トレーディング・センターの真ん中で大量吐血し、そのまま帰らぬ人となったそうである。そして数日後アディンが昨年10月から7月まで9ヶ月もの間、生死の間をさまよう大病を患ったことを知った。一説によると肺

<sup>42</sup> “ordinary”の略で、7年の初等教育をおえたのち4年間のセカンダリー・スクールへの進学資格を得るための試験。その後、A (“advanced”) レベルに合格すると（合格率40パーセント）、2年間の中等、技術教育プログラムなどを経て、修了者は国立マケレレ大学あるいは海外で勉強する資格を得ることができる。

ガンであるという。オウォリ教授は親族としてできる限りのことをしたようだ。一時、ムラゴ病院にも入院させたという。「しかし、教授がアディンをムラゴから連れて帰ってきたその日にアディンは再び酒と煙草を始めたのだ」とひとびとは口々に言う。

その日、宿舎の庭で助手のオロカ・マイケルと打ち合わせをしているところにアディンが無言で近づいてきた。やや太ったようだ。むくんでいるのかも知れない。「大病を患ったので健康のために酒はやめたんだ」という彼のほうから、ぶんとアルコールの臭いがした。それでも2004年に滞在した際は名門マケレレ大学の卒業生であり、年長ということで敬意を払っていたオロカに対しても、「新米なんだからでかい面するな」と暴言を吐く。挨拶もなく無言で近づいてきたばかりでなく、年長者への暴言は、呪詛を招く可能性があるためパドラでは忌避されている。話にも脈絡というものがなく、突如「私は、お前からお金を奪おうとしているのではない。正当に働いて給料をもらいたいだけだ」と言いつつにじり寄ってくる。異様な雰囲気を感じた私はとっさに全権をオロカに委譲し、以降オロカと交渉するように言ってその場を離れた。当惑し、心配もして周囲に聞いてみると、アディンの病はよほどひどかったようだ。およそ3ヶ月は、全く意識がなかったという。誰もが、もう彼は助からないと思っていた。グワラグワラに帰ってきてからも、奇矯な言動が目立ち、ついに妻は子供を連れて逃げてしまった。はからずしてオドウェと同じ結末を引き起こしてしまったわけである。

オロカは、その後何度かアディンの訪問を受けており、その都度無難にやりすごしていたが、私と二人の時には「狂人に任せられる仕事はな

い」とにべもなかった。私も滞在中何度か彼を見かけたが、必ず一人であり、アルコールの臭いを漂わせていたようだった。向精神薬を処方されているとの噂も耳にした。

以前に聞いたことがある。アディンはこの地域きってのエリートなだけに誰からも妬まれており、しばしば妖術や邪術の対象となっているに違いないと。

### 結語

以上、ウガンダ東部、パドラにおける「問題飲酒」との関係を手がかりとしてオボウォ、オドウェ、バジル、アディン4人の人物について素描してきた。その過程で、彼らの社会階層と行動様式には、奇妙なほどに符合する共通点が認められた。ある程度地位や教育があり（バジルやアディンなどはスーパーエリートに属する）、成功者でもある彼らが、ほとんど同じ経緯を示しつつ破綻してゆくのだ。これは、脱植民地化の過程で生まれたエリートの典型的症例であるにとらえることができそうなほどである。

「問題飲酒」がそもそも飲酒様式の基準が社会によって相対的であることを示そうと導入された概念であることを考えると、このことは非常に皮肉である。

彼らのように仕事もなく、朝から酒浸りになっているエリートをグワラグワラ村ではごく普通に見ることができる。ちょっとした小金を持っていれば、地酒はいくらでも飲めるのだ。「退屈な村の生活では、それぐらいしかすることがないから」という者もいる。きっかけはエリートへの妬みから発する妖術の犠牲になることを恐れてのことかも知れないし、蔓延するHIVの発病を恐れてのことかも知れない。こと

によるとエリートにふさわしい仕事がないことからくる現実逃避かも知れない。しかし、彼らが酒浸りになることそれ自体も、妖術や呪詛の効果と見られてしまう。どこからも断ち切りがたいこの悪循環は、グワラグワラ村のエリートのもとについて回っているのである。

もちろん、私は、彼らを批判しようとして本稿をしたためているわけではない。私は単に自分の関わった一社会の実態を「問題飲酒」というトピックを手がかりにして描き出そうとしているだけである。パドラにおいて、アルコールについて語ることは、しばしば妖術について語ることであり、ときにエイズに、そして脱植民地化のエリートの悩みについて語ることに繋がることであった。ここには、解きほぐしがたい様々な一見新しい問題が集約していることが、再び確認されたといっている。もっとも、妖術の近代性を巡る最近の知見から言えば、これは当然のことなのかも知れない。妖術が伝統の残存などではなく、近代性の中で息づいており、それがステレオタイプ化された妖術の領域ではなさそうなところで生き生きと機能していることは、たびたび指摘される<sup>43</sup>。妖術の問題は、しばしば近代性の問題だというわけだ。

新しく知られるようになった近代性を帯びた病が妖術の言葉で語られ、説明されるような現実は、ここパドラに限らない。類似した報告は、

<sup>43</sup> Bond & Ciekawy [2001]、Comaroff & Comaroff [1993]、Geschiere [1997]、Fisiy & Geschiere [2001]。

<sup>44</sup> Ashforth [2002] 参照。ウガンダ北部のエボラの文化的意味を論じる Hewlett & Amola [2003] にもジョク *jok* (霊) の観念が説明体系として言及されている。

<sup>45</sup> イギリスは、そもそもは植民地運営を任せるために現地人エリートの育成に力を注いでいた。パドラで最初の医師となったオウォリ教授などは、その第一世代の一人である。

例えばHIVやエボラ出血熱などを対象としてもあちらこちらでなされている<sup>44</sup>。脱植民地化の様々な問題の中でも、こうした不治の病のイメージとそれに対する対処行動は、近代化がアフリカ諸社会にもたらした邪術の効果を顕在化させる。植民地運営のために移植された教育システム<sup>45</sup>のなかで出口がなくなったエリートたちの存在も、「問題飲酒」も、エイズもエボラも疑いなくそのひとつである。しかもそれは、社会や文化の中に独立してぽっかり存在するのではなく、しばしば別の、これもまた深刻な問題群と分かちがたく結びついているのである。人が語りの中でそうした災いの原因を何に求めるかは、その社会の文脈の表明であり、悩みや問題の本質を語ることである。「災因論」という分析概念に今も積極的な有効性があるとすれば、こうした文脈を解きほぐしてゆく手がかりとしてであろう。今では広く共有された妖術の近代性というその認識に続く問いは、おそらくなぜ妖術がそうした説明を維持できるのかという問いである。相互に絡み合った説明不能の災因をまがりなりにも関連づけ、説明に似た物語に仕立てあげて語る可能性を持つのはひとつとを近代以前の神話的時間の中に一時的にであれ誘うことのできる妖術の語りだけだということか。この問題に説得力のある解答を与えるには、本稿では今後の課題として残された、一部ですでに開始されている<sup>46</sup>脱植民地下アフリカ諸社会のエリートの実態解明とともに、古典的ではあるが、当該社会の語りを彩るラム、ジュオギ、ジャジュオキなどのオカルト観念についてのより精密な文脈に即した検討が必要とされているのである。

<sup>46</sup> Werbner [2004] など参照。

## 参照文献

- Ashforth, A. 2002, "An Epidemic of Witchcraft?: The Implication of AIDS for the Post-Apartheid State," *African Studies*, 61(1), pp.121-43.
- Bond, G. C. and D. M. Ciekawy 2001, *Witchcraft Dialogues: Anthropological and Philosophical Exchanges*, Athens: Ohio University Press.
- Cohen, D. W. and E. S. Atieno Odhiambo 1992, *Burying S M: The Politics of Knowledge and the Sociology of Power in Africa*, London: James Curry.
- Comaroff, J. and John Comaroff 1993, "Introduction", *Modernity and Its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*, xi-xxxvii, Chicago: Chicago University Press.
- Crazzolaro, J. P. 1951, *The Lwoo, Part II*, Verona.
- Evans-Pritchard, E. E. 1937, *Witchcraft Oracle and Magic among Azande*, Oxford: Clarendon Press.
- 1956, *Nuer Religion*, Oxford: Clarendon Press.
- Fisiy, F. and Peter Geschiere 2001, "Witchcraft, Development and Paranoia in Cameroon: Interactions between Popular, Academic and State Discourse." Moor, H. and Todd Sanders (eds.) *Magical Interpretation, Material Realities: Modernity, Witchcraft and the Occult in Postcolonial Africa*, London: Routledge.
- Geschiere 1997, *The Modernity of Witchcraft: Politics and the Occult in Postcolonial Africa*, (trans). Peter Geschiere and Janet Roitman, Charlottesville: University Press of Virginia.
- Gordon, R. G. Jr. (ed.) 2005, *Ethnologue: Languages of the World, Fifteenth Edition*, Dallas, Tex.: SIL International. (<http://www.ethnologue.com/> 2006年10月18日参照)
- Heath, D. B. 1987, "A Decade of Development in Anthropological Study of Alcohol Use, 1970-1980," Douglas, M. (ed.) 1987, *Constructive Drinking: Perspectives on Drinking from Anthropology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hewlett, B. S. and Richard P. Amola 2003, "Cultural Contexts of Ebola in Northern Uganda," *Emerging Infectious Diseases*, Vol. 9, No. 10, pp. 1242-8.
- 栗本英世 1988, 「ナイル系パリ族における *jwok* の観念—『超人間的力』の民俗認識」『民族学研究』第52巻4号.
- Langlands, B. W. 1971, "The Population Geography of Bukedi District," Occasional Paper, No. 27, Department of Geography, Makerere University, mimeo.
- Lienhardt, G. 1961, *Divinity and Experience: The Religion of the Dinka*, Oxford: Clarendon Press.
- Marshall, Mac (ed.) 1979, *Beliefs, Behaviors, and Alcoholic Beverages: a Cross Cultural Survey*, Ann Arbor, MI, University of Michigan Press.
- McDonald, M. (ed.) 1994, *Gender, Drink and Drugs*, Oxford: Berg.
- Middleton, J. and E. H. Winter (eds.) 1963, *Witchcraft and Sorcery in East Africa*,

- London: Routledge & Kegan Paul.
- Mogensen H. O. 2002, "The Resilience of *Juok*: Confronting Suffering in Eastern Uganda." *Africa*, Vol. 72.
- 長島信弘 1972, 『テソ民族誌—その世界観の探求』中公新書.
- 1982, 『死と病の民族誌—ケニア・テソ族の災因論』岩波書店.
- 1983, 「序」『ケニアの六社会における死霊と邪術—災因論研究の視点から』『一橋論叢』Vol. 90(5).
- 2004, 「長島信弘 (1937-) 『死と病の民族誌—ケニア・テソ族の災因論』岩波書店, 1987」小松和彦・田中雅一・谷泰・原 毅彦・渡辺公三編『文化人類学文献事典』弘文堂、pp. 535-6.
- 野口裕二 1996, 『アルコールリズムの社会学—アディクションと近代』日本評論社.
- Obillo, O. R. 2000, "A History of Conflict between Christianity and Traditional Religious Practices in Padhola, Tororo District, 1900-1962," B. A. Thesis, Dept. Educ. (ITEK), Kampala: Makerere University.
- Oboth-Ofumbi, A. C. K. 1960, *Padhola*. Nairobi: Eagle Press.
- Odoi-Tanga, F. 1992, "A History of Cotton Production in Padhola County of Eastern Uganda: 1925-1990," M. A. Thesis. Dept. of History, Kampala: Makerere University.
- Ofcansky, T. P. 1996, *Uganda: Tarnished Pearl of Africa*, Oxford: Westview Press.
- Ogot, B. 1967a, *History of Southern Luo, Vol. I, Migration and Settlement*, Nairobi: East African Publishing House.
- 1967b, "Traditional Religion and Precolonial History of Africa: The Example of Padhola," *Uganda Journal*, 31(1).
- Othieno, T. 1967, "An Economic Study of Peasant Farming in Two Areas in Bukedi District, Uganda," unpublished M. Sc. Thesis, Kampala: Makerere University College.
- Robbins, M. 1977, "Problem-Drinking and the Integration of Alcohol in Rural Buganda," *Medical Anthropology*, 1(3).
- Room R. 1985, "Alcohol and Ethnography: A Case of Problem Deflation?" *Current Anthropology*, 25(2), pp. 169-191.
- Sharman, A. 1969, "Social and Economic Aspects of Nutrition in Padhola, Bukedi District, Uganda," Ph. D. Diss. University of London.
- 末継吉間 1976, 『ウガンダーその国土と市場』科学新聞社出版局.
- Tumusiime, J. (ed.) 1991, *Uganda, 1986-1991: An Illustrated Review*, Schomburg General Research, Kampala: Fountain Publisher.
- 梅屋 潔 2005, 「グローバル化と他者」奥野克巳・花渕馨也編著『文化人類学のレッスン—フィールドからの出発』学陽書房、pp. 235-58.
- Wallman, S. (ed.) 1996, *Kampala Women Getting By: Wellbeing in the Time of AIDS*, Kampala: Fountain Publishers.
- Walusimbi, L. 1996, "The Future of the Minority Languages in Uganda," *Makerere Papers in Languages and Linguistics: Journal of the Institute of Languages of Makerere University*, Vol. 1, No. 3, pp. 43-49.
- Werbner, R. 2004, *Reasonable Radicals and Citizenship in Botswana: the Public*

*Anthropology of Kalanga Elites*,  
Bloomington: Indiana University Press.

Willis, J. 2002, *Potent Brews: A Social History of Alcohol in East Africa*, Oxford: James Curry.

Yokana, Ogola 1993, "The Bukedi Riots of 1960 with Special Reference to Padhola: A Study of peasant Uprising against Colonial Rule," M. A. Thesis, Dept. of History, Kampala: Makerere University.

科学研究費補助金若手研究 (B) 「ウガンダ・アミン政権下における『大主教殺害事件』を巡るoccult的言説の研究」(課題番号18720245)。

[2007年3月5日受付]

### 新聞記事等

*Boston Globe*, 1993年7月22日、p. 10.

*Chicago Tribune* 1993年8月17日、p. 4.

*The New Vision*, "Japadhola to elect King," 1998年9月16日、"Adhola Leader Names Cabinet," 1998年10月26日.

### 付記

題材の性質上、本稿に登場する個人名は一部仮名を用いている。なお、本稿のもとになった現地調査およびその記録の整理には、下記の研究資金の一部を用いている。記して感謝したい。平成8・9年度科学研究費補助金特別研究員奨励費「東アフリカにおける災因論—『問題飲酒』を手がかりとして」(受付番号5519)、平成13年度笹川科学研究助成金「東アフリカにおける『民族』アイデンティティの形成史—ナイル系ジョパドラ社会を中心として」(研究番号13-054)、平成14・15・16年度科学研究費補助金特別研究員奨励費「環ヴィクトリア湖畔ナイル系諸『民族』の生成と失敗した戦略—A.C.K.オボス=オフンビの生涯についての語りを通してみた微視的研究」(受付番号11166)、平成18年度